

Appendix

委員会議事録

平成 24 年度木のまち木のいえ担い手育成拠点事業/木材学会 委員会（幹事会） 議事録

- A. 日 時 2013 年 2 月 1 日（金） 15：00～17：00
B. 場 所 木構造振興株式会社 会議室
C. 出席者 8 名（順不同・敬称略）
飯島泰男（秋田県大木高研）、井上正文（大分大）、五十田博（信州大）、板垣直行（秋田県大）、青木謙治（森林総研）、加来照彦（現代計画）、山崎真理子（名古屋大）、土屋潤（福岡大/記録）

D. 配布資料

- No.0 議事次第
No.1 講習会（セミナー）等開催記録簿～東北・東海・北陸・九州～
No.2 アンケート結果速報
No.3 AIJ2011-1～AIJ2012-2
No.4 平成 24 年度木のまち・木のいえ担い手育成拠点事業事業計画書（木材学会）
No.5 木のまち・木のいえ担い手育成拠点事業中間発表会資料
No.6 「木のまち・木のいえづくり」を目指す若者のための教育プログラム 木材学会（加来）

E. 審議事項：

1. 今年度の活動概要（資料 No. 1）

各地域セミナーの幹事からセミナーの報告があった。

今年度のセミナーも概ね成功であったが、以下の課題もあった。

東北

- ・学生の自主的な運営（木匠塾）。
- ・院生の参加が少ない。

東海

- ・川上側と川下側がお互いを知り合うという要望も出ていたが現実にはディスカッションの場を設けるのは難しい。
- ・他地区と同様に、交流会などで大学ごとに固まってしまう。

北陸

- ・信州大学の学生が多かったため既に聞いている内容も多く、新鮮さに欠けたかもしれない。
- ・職藝学院に参加してもらったことは各々の刺激となり、大変良かった。

九州

- ・防耐火に関しては触れることが少ないので学生にとっても良い機会だったのではないかな。
- ・セミナーのためでなく、授業等でやったモノづくりの話をしてもらっている。

2. セミナー運営、今後のあり方について

- ・セミナーも各々の大学の現状に縛られているので、いろいろと難しいことが分かった。
- ・助成金があるうちは学生は遠くにも来るが、それがなくなり参加しない、というのでは意味がない。
- ・社会人になればお金をかけて勉強するのに、学生のうちはどうしてもそれに気が付かない。
- ・木匠塾（東北）はサークルなので、学生は自費で参加する（教員側が企画したものだと、学

生は自覚を持って参加しない)。

- ・単位認定により積極的に参加することが考えられたが。
 - ・単位よりも、就職に役にたつことのほうが最近の学生には興味があるようだ(農学系)。
 - ・単位認定・互換より、キャリアパス、キャリア支援の方向性を持たせるべきか。
 - ・住宅メーカーのリクルーター等(技術系)を数社呼ぶと学生は集まるのではないか。
 - ・住宅メーカーが学生に何を要求しているのか気になる。木造を勉強している学生ではなく、環境(断熱)をやっている学生が採用されたり。とはいえ、企業のための大学になるのは良くない。
 - ・東北ではすべて学生たちで企画・運営をさせ、一部、講師を用意するので聞くように、という形にした。
 - ・東北大の学生が学生自身で進める形式を作ってから、うまく進むようになったが、最近は大大学院生が減っていて運営が難しい。
 - ・継続するには、教員がお膳立てするのはうまくいかないのでは。
 - ・教員に大きな負担を強いてまでも続けるのかということと考えてしまう。
 - ・やったことが学生のステップアップにつながっている実感があると教員側としてはうれしいが、負担と感ずるかは人によるのでは。
 - ・東北・木匠塾スタイルならば、教員側の負担が少ない。
 - ・学生の実行委員会を組織して進めるのが良いのでは。
 - ・社会人OBに参加してもらうことを考えてはどうか。学びたい大人(OB)と学生と一緒にやる仕組みがあっても良い。
 - ・教育は成果が見えるのに時間がかかるので、できれば続けて行きたい(行くべき)。
 - ・交流の仕組みとして、無作為に班分けをしグループワーク等をさせるのが効果的のようだ。
 - ・秋田県立大では、フィールドワークで単位が取れる制度があり(大学院のみ)、かつてはそれを利用していた。
 - ・単位認定には、教員が賛同しても、学部や大学が認めるか、大学間の単位互換協定の有無等の検討事項が多々ある。
 - ・本活動のキャリアパスでの取扱いはどう捉えるか。インターンシップとして認められる等、インターンシップ化して行くことも考えられる。
 - ・インターンシップ化は、単位認定よりも実現性が高い。
- セミナーの内容とインターンシップでは意味合いが異なるのではないか。
- ・木造のファンを増やす、興味を持ってもらうのが当初の趣旨。単位認定となると、大学のしごらみが出てくるし、学問となると今の内容では難しいのでは。
 - ・学生のモチベーションが下がっている現状を理解してもらい、このセミナーの意味を文科省に認めてもらうにはもっと多様な話を盛り込む必要がある。木造の話だけでは足りないのではないか。
 - ・学生(人)は「流行り」に寄ってくるが、そういう仕組み(を利用すること)が必要。
 - ・学生への説明会の場を設ける(企業側のメリット)等で企業に協賛してもらい、運営することも検討(積極的な機械メーカーもある)。
3. 教育プログラム・教育システムについて
- ・推奨シラバス作成、提案についてはあまり進まなかった。
- 対象とする学生やその知識量が明確でないことも原因。その結果どこまで、どの程度を教え

るのが決定できない。

・現状では工業高校の教科書などはしっかりしている。木造に関して、高卒と大卒のレベルに大きな差があり、大卒で急に高度になり、範囲が割とはっきりしている S、RC 造の基本を教えるのとは異なる。

・建築学科のカリキュラムは一級建築士受験資格の範囲に拘束されてしまう。

・一級建築士の試験問題と絡めることも考えられるが、そうすると面白味に欠ける。

・地方大学では、すべての専門の教員がいることはない、いくつかの分野を教えなければならない現状は当たりまえ。

→孤立している先生や大学をつなげる必要がある。

・新しく木造をやりたいけどやり方がわからない、という先生も多い、そんな先生を巻き込みたい。

・近年は授業コマ数を減らす方向性が強くなる一方で、レベルをあげてさらにコマを増やして教えるのは難しいのではないか。

→その様な状況で、気軽に「他大学で受講できる」という制度は良い（単位互換制度等）。

→東京、名古屋などの都市圏ではできるかもしれないが、他地域では難しいのでは。

・工業高校、高専、職能大等の実務教育校と組むのも良いのでは。

・文科省の生涯教育課で行う、小中学校の教育で、地元の機関が出前で授業をするというものがある。そういう場も活用できないだろうか。

・職業科の比率は秋田は高いが、工業高校の卒業生は 80%が県外に就職してしまう。県立大学卒も県内に就職できない（高卒しか採用していない等）。地元で働きたいのに求人がないのが実態で、企業がもっと優秀な人材を採るべき。

4. 今後の活動のあり方

加来アドバイザーよりこれまでの活動の所感、今後についての提案（資料 No.6）があり、以下の意見が出された。

・これまでの取り組みで指摘された、大学間の連携の在り方・単位互換制度の方向性を探りたい。

（3年間の成果を文科省・高等教育課等に説明し、そのような制度についての検討を促したい考え）

・今後もこの方式（セミナー）を続けるのか、助成の形式は変わるので、新たに研究助成の獲得を目指したい。

・それを踏まえて、来年度にこれまでの成果報告とキックオフ的なシンポジウムの開催など、成果報告の形も検討が必要（木造に関して、全国で数か所など）。

・建築学会との連携は考えられないか。

→木造だけ取り上げるのは難しい、共通の教育プログラムが必要ではないか。

・教育システム（の改革）に絡んで様々な材料について木造をスタートとして検討することはできるのではないか。

・3年間の取り組みで「カリキュラムが形成された」というよりもさらに改良、検討が必要ではないか。

・本活動は、知識の伝達か、ものづくり教育か、どちらが目的なのか。

→ふたつの目的をカバーしたい、適当なセミナー名、科目名を考える必要がある。

・木造教育のこれからを見据えて、技術の伝承と学生のモチベーションアップの2路線が考え

られる。その中で基本が学べるようなカリキュラムがあれば良い。

- ・「どこまで教えなければいけないか（基本）」があるのだろうか、木造の場合それが明確でない。
- ・これまでのセミナーは試行であり、これをどのようにまとめ、次へつなげて行くのが重要。

5. 事務連絡

- ・来年度の方向性決定 2月末まで
- ・最終成果報告会 3月11日

以上